

## ケヴェール・ジェルジ著／平田武訳

### 『身分社会と市民社会—19世紀ハンガリー社会史』

(刀水書房、2013年2月、A5判、338頁)

渡邊 昭子

本書は、ハンガリーで1998年に出版され、2001年に改訂版が出された『ハンガリー社会史—改革時代から第二次世界大戦まで』（以下『ハンガリー社会史』と略記）の前半部分の翻訳である。訳出された部分の原タイトルは「改革時代から第一次世界大戦までのハンガリー社会史」であり、ケヴェール・ジェルジが執筆している。訳出されていない原著後半部分はジャーニ・ガーボルが執筆し、「ホルティ時代のハンガリー社会史」と題されている。

本書の成立事情は原著の序文に記されている。1990年代初頭、エトヴェシュ・ロランド（ブダペシュト）大学の社会学研究所で、社会学および社会福祉を学ぶ学生のために、社会史の授業が導入された。講義は3セメスターで計画され、最初の2セメスターをケヴェールとジャーニが担当することになった。数年後に文献の抜粋集が出版され、さらにその後、この本が教科書として作られた。だが、本書の根は、1970年代にまで遡るという。2人はデブレツエンで学生だった頃に、歴史学の刷新を求めて「大学生の視点から」という草稿を共同で書いたことがあった。経済史研究の進展に比べて社会史研究が進んでいないこと、社会史や政治史の研究が、最も重要な隣接学問分野である社会学と交流を持っていないこと、そのため、アナール学派などのブルジョワ史学の方法論や視点などの成果を活用できていないことなどを批判した。だが当時には、まさか自分たちがハンガリーで最初に社会史のまとめを書くことになるとは思いも寄らなかった<sup>(1)</sup>。

ケヴェールの問題意識は、どのように本書に現れているのか。全7章からなる構成を概観しよう。第I章は「解釈枠組み」であり、第1節「社会科学上のパラダイム」では、20世紀後半の社会科学で支

配的だったパラダイムとして、近代化論と、後進性論ならびに従属論を中心に紹介する。第2節「社会史叙述と時期区分」では、ハンガリー社会についての語りをたどりながら、政治史や経済史の伝統的枠組みの時期区分が、社会史の検討において単純に当てはめられないことを示す。第II章「人口—時間と空間の中で」の第1節「性別と世代」では、歴史人口学や家族復元調査の成果を基に、マクロな視点として人口動態を、ミクロな視点として家族を取り上げて、ヨーロッパの他地域と比較しながらハンガリーの傾向を論じる。第2節「定住地の構成と都市の階梯」では空間を歴史的に考察し、都市と農村、それらのネットワーク、国内外の移民などについて、新歴史地理学の成果を利用しつつ論じる。以上の2つの章はある社会を捉える際に前提となる基本的条件の検討である。

第III章「構造と軸」は社会構造を扱う。最も多くの紙幅が割かれている章であり、本書の中心といえるだろう。近代の社会を取り上げる際にしばしば用いられる国勢調査から、ヨージェフ（ヨーゼフ）2世期のものと、1857年と1900年のものを取り上げ、各統計での社会の分類方法を検討する。そこから3つの軸「職業活動構成」「財産・所得配分」「地位とプレスティジ」を抽出して、まず、社会構造を分析するための視角を提示する。そしてこの3つの軸を各節のテーマとして、それぞれに社会変容を検討する。職業活動の軸では工業化や専門職業化、財産・所得配分では土地所有関係や貧困、地位とプレスティジでは貴族位や敬称などが検討の対象とされる。そして最後に、これらの分析から、今までの社会史叙述において仮定されていた歴史的・法的身分に基づく集団の解釈にも疑問を投じる。地位とプレ

ステイジの軸で検討すると、そのような塊が存在しなくなっていて、再結集もされなかったことが確認できるのである。

第IV章からは各論となる。「参加と支配」では政治との関係がテーマで、前半は有権者の分析を中心に、政党や非有権者の活動について取り上げ、後半では命令機構を機能させていた官僚について、19世紀における連続性と変化を中心に論じる。二重制期に没落貴族が官職に押し寄せたという一般的なイメージは、様々なデータを重ねて検討することによって、虚構であることが示される。第V章は「文化の成層構造」である。「文化と生活様式」の節は、多様な住居および衣服の差異と変化を3つの軸と関連づけながら論じる。「文化とエスニシティ」の節は、宗派、ネイションとナショナリティ、言語集団とそれらの関係について、そして、多様な要素の間で起こった接触、すなわち、同化や文化変容について、当時のデータと多くの研究成果を取り上げつつ記す。章末で、宗派と言語により形成される宗派エトノスは私的領域で文化的規定力を保ったが、それを、政治的な領域にあり続けた国民や民族というカテゴリーと区別すべきだと注意を促す。この章は多様な切り口で文化を考察していることから、タイトルは原題にそって「文化の諸層」と訳す方が適切かもしれない。第VI章「中間階級の心性をめぐる諸問題」では、この時代の社会を捉える際にしばしば論じられてきた中間階級の問題すなわちジェントリ問題とユダヤ人問題について、アイデンティティと偏見に視点を据えて心性史の面から考察する。第VII章は「定位と移動」で社会移動のチャネルとして学校教育体系を取り上げ、各種の学校に通う子の社会的出自や進路について考察し、また、ライフ・ヒストリーと関連させて、銀行職員、司祭、女性奉公人などへの定位を扱う。

ケヴェールは歴史的事実を断定的に語るのでなく、既存の研究を次々に挙げながら議論を整理し研究上の問題を提起する。教科書として書かれたものであり、個別の歴史研究とは異なって、本書や『ハンガリー社会史』には著者による問題提起や結論も付されていない。にもかかわらず、ハンガリーでは

反響を呼び、本書をめぐって多くの議論が見られた。そのため、ここでは主として現地での批評を紹介しつつ、本書が書かれた当時のハンガリーにおける社会史研究の状況を確認することにより、本書の意義を考えてみたい。

初版公刊の翌年、アカデミーの歴史学研究所で多くの参加者を集めて批評会が開かれた。シャシュフィ・チャバが、そこでの議論の主要点を示しつつ『珊瑚 Korall』誌に執筆した書評から論点をまとめてみよう。なお、『珊瑚』誌の副題は「社会史雑誌」であり、ケヴェール自身も諮問委員会に加わっている。書評は折しも2000年の創刊第1号に掲載された<sup>(2)</sup>。

批評会で議論の中心となったのは、『ハンガリー社会史』全体の構成についてだった。ケヴェール執筆の部分は動態的な視点から書かれる一方で、ジャーニによる部分は静的・構造主義的であり、まったく異なる視角と構成による文章が一冊になっていると批判された。日本語に訳出されていないジャーニ執筆部分は次のように章が並んでいる。「序」「人口構成」「社会構造の基本線」「エリート」「中間階級」「小市民、農民」「下層階級」「生活様式：住文化」「慈善と社会政策」「政治制度と投票者の態度」。それまで一般的に使われてきた社会内部の階層分類を用いて記述している<sup>(3)</sup>。対比してみると、分類方法自体を構造と軸という観点から見直そうとするケヴェールの叙述の斬新さが見て取れるだろう。シャシュフィは、対象とする時代の幅が違うことを理由に、構成の相違は問題でないというが、それでもなお、第一次大戦後の社会についても、ケヴェールによる多次元的な構造分析がないのが残念だと記している。

ケヴェール執筆部分、すなわち本書の構成については、社会の構造分析全体を検討した後に構造を映しだす各論が互いに結びつく形で配置されていて、論理的一貫性がありバランスも取れているという。ただし、ケヴェール自身の分析に基づく中間階級の心性の章は多少意表をつくものである。中間階級だけでなく、研究蓄積のある農民についてや、さらには小市民など他の社会集団の心性についても取り上げるべきだし、アイデンティティの表明や表出の形

態や、アイデンティティ再生産のメカニズムなどについて、やはり既存の研究成果を用いて書くことができただろうと指摘する。冒頭の「解釈枠組み」の章には、社会学の鍵概念や前史、中心となる用語の説明等を加える必要がある。研究所での議論の際に、著者自身が本のタイトルにはむしろ「ハンガリー社会史入門」がふさわしいと述べたことからも、導入部での説明を増やして難解さを和らげるべきだったろう。解釈枠組みのパラダイムの説明は経済史の基盤に偏っているが、まさにこの時代に形成される心性カテゴリーとしての国民や、国民国家、国民社会などの機能や分析について検討する必要もあるだろう。その他に欠けているものとして、政治思想史の枠組みや、「構造と軸」の章での地理的空間の検討、教育に関するより広い関連での検討なども挙げられている。もちろん、以上の多様な議論を引き出したこと自体が本書の重要性を示している。シャシュフィによれば、『ハンガリー社会史』はハンガリーの近代社会の変容をそれ自身の論理に従って論じた社会史の基本書であり、存在自体に極めて重要な意味がある。

本訳書の基になっている改訂二版が出版された後、サライ・ユーリアが「再考されたハンガリー史」のタイトルで書評を著した<sup>(4)</sup>。サライの議論の中心は『ハンガリー社会史』が教科書として適切かどうかであり、前半と後半のバランスが悪いことや、扱っている事項が偏っていることなどには修正が必要だとする。サライの批評の興味深い点は、社会学にとっての本書の意義を説明した点である。当初、社会学の側から社会史の講義を求めた理由は、社会学が危機にあったからだという。1980年代末から90年代初頭にかけて、それまで合意されていた解釈や方法が突如として白紙となり、既存の理論による社会の説明が不十分であることが判明した。とくにマルクス主義の衰退による理論の空白や混乱が大きかった。それを埋めるために期待が寄せられたのが社会史だった。過去との類推から現在を再考することで、自身のアイデンティティを再び見つけられるのではないかと考えられたのである。当時のマルクス主義に基づく高等教育では、文化的な他者性や、人間の

尊厳を重んじる視点が欠けており、人類学やカルチュラル・スタディーズ、ジェンダー研究などの新たな研究分野の地盤もなく、広義の意味での文化の問題を扱う道を切り開いていたのは歴史学だったのである。

サライは、本書の批判的な論じ方も高く評価する。解釈枠組みにおいて第一の論敵はマルクス主義だが、そこから生まれた階級史観を捨ててしまうことはない。同時代や後に作られた他の社会理論についても前提から再考しつつ、後の時代の専断をできるだけ取り除いて各時代を解釈しようと努めている。そして筆者はこの「かみそりの刃の上で踊るような課題」を、羨望に値するほど自制的かつ創意に富む方法で解決した。そのため読者は、いずれかの理論に基づく一方的な分析を得るのではなく、理論を自由に選ぶことができる。歴史的事項についても、これまで一般に教えられてきたことを覆すような新しい研究が紹介されていることを評価している。

ではケヴェールはどのようにして本書の構成や叙述法に至ったのだろうか。本書成立までの経緯を回想したエッセーによれば、きっかけは、1992年2月に社会学研究所から届いた分厚い封筒だった。社会学研究所の委員会が、新たに開講される3セメスターの社会史についての「外部専門家」としてケヴェールを会議に招聘したのである（前述のサライは委員の一人だった）。会議では議論が戦わされ、最終的には自分が講義を担当することになったが、理由はわからなかった。人に聞かれると、たまたま出席していたからで、批判的な意見を最もよくまとめたからだと冗談で答えたという。実際のところ、会議では根本的かつ建設的な批判をおこなったようである。最初に送られてきた書類には必読の文献目録や鍵概念が挙げてあり、各セメスターでの基本文献も記されていたが、それを読んで、大きな欠乏感を味わったという。社会史をテーマとするハイナル・イシュトヴァーン・サークルはすでに1986年に成立し、議論を繰り返してきたが、まったく視野に入れられていなかった。出発点である時期区分からして違っていた。原案では政治史に対応してオーストリアとの妥協（1867年）が起点とされていたが、ハイナル・サー

クルでは19世紀前半の改革時代か、必要ならばナポレオン戦争まで遡る必要があると論じていた。文献目録には当時の著名な歴史家が並んでいたが、ハイナル・サークル設立者たちの研究はまったく見当たらず、すでに公刊されていたトート・ゾルターンのセクサールド研究の本すら載せられていないかった。本書はもちろんこれらの批判を基に組み立てられている。対象とする時代は19世紀前半やときにその前にまで遡るし、ハイナル・サークルのメンバーの著作も多く登場する。ただし、それまでの歴史研究をすべて否定するのではなく、それらも歴史的な検討の土台に載せる。ケヴェールが講義のために書いたシラバスには、原案で鍵概念として挙げられていた近代化が登場するが、それは後進性理論と対置され、市民化はシミュレート資本主義と、身分制は、歴史的・法的身分や行動社会学的身分と併存する。多方向に開かれた姿勢は、ケヴェールが80年代に抱いていた「折衷的であれ」という信条が基盤にあった。だがそれだけでなく、その後突然に9月開講の依頼があり、毎週自転車操業で（50年代にドイツ語教師がロシア語を教えた時のように）講義をこなさねばならなかったことも理由にあった<sup>(5)</sup>。

ケヴェールが重視しながらも社会学研究所の原案で無視されていた研究とはどのようなものなのだろうか。ハイナル・サークルに関しては訳者あとがきで紹介されているので、ここでは、ケヴェールが具体的に名を挙げているトート・ゾルターンのセクサールド研究を例に取ってみよう。そのタイトルは『世紀転換期のセクサールド社会—市民的／ブルジョワ的変容における歴史的階層形成と社会的階層再編』で、1989年に出版された。セクサールドは、ブダペシュトの南方150kmほどのドナウ川西岸に位置する小都市である。同書は19世紀末から20世紀初頭にかけてのその社会を分析する。冒頭の著者説明によれば、研究の端緒となったのは1972年に実施した社会学的な世帯調査だった。だが「不寛容な分野である社会学」では初步的な解決の試みしかできないため、歴史的な分析に進み、文書館で孤児局文書と出会う。この文書は未成年相続者による遺産相続を保障するために作成されたもので、他の史料に比

べて、家族や家計について多面的に記されているうえに、子の成人後の職業や居住地がわかる場合も多く、マクロな統計では見えない世代間の階層移動を追うことができる。全部で272件の事例を分析して、当時のセクサールド住民について、居住地区、職業、言語と宗教、階層移動のパターン、流動性、家族構成、財産蓄積、住居や家具や衣服などの家財と生活状況などを分析し、それらの要素の結びつきから、いくつかのグループを析出する。比較的移動が少なく住民の核となっているのが農民と手工業者となる市場町ブロックであり、それはさらに、例えば階層移動の視点からは次の3類型に分けられる。1. 多子で財産細分化にさらされやすく潜在的に移動の可能性が高いカトリック土地所有農モデル、2. 財産を細分化から守るために出生制限をし、そのために移動も少ないカルヴァン派土地所有農モデル、3. カトリックを中心とするが他宗派も含み言語的にも同化者が多く、財産は平均的に農民よりも多く、多子で、市場町ブロック外への移動も多く見られる、市場町小市民モデル。ただし、このモデルも歴史的に形成されたものであることは、分析の前提として説明される、時代の捉え方からも明らかである。すなわち、身分制的な枠組みが100年ほどかけて撤廃された一方で、資本制が地方の市場にまで生産手段や消費財を至らせ、生活規範や文化的価値も変容させるようになっていた時代である。法や経済制度のマクロな変化が、セクサールドの農民や手工業者というミクロな社会に与える影響を検討するのだが、それも一様に現れるわけではない。「非同時性は、単に時期の違いに現れるのではなく、それぞれの時期の中で、原理的には同時でありながらも、歴史的には決定的に異質な起源を持つ諸要素の間でも現れる」と、社会史を捉える際に複合的かつ長期的な視点が必要になることを強調している<sup>(6)</sup>。

ケヴェールの本書ではトートの分析内容や結論について部分的には記されているが、ここではむしろ両者の視点や分析方法の共通性に注目したい。とともに、社会を分析する方法自体を検討に付し、対象とする社会について同時代史料で得られる情報や後の研究から、対象に即した分析方法や概念を抽出し、

それを用いて社会の分析へと立ち返る。そのために多くの基本的な枠組みや概念が、当初から決定論的に固定されたものではなく、開かれたもの、論争可能なものとして提示されるのである。

だからこそ評者にとって残念に思われるるのは、本書でハンガリー社会として前提されている枠組みが考察されずに残されたことである。本書のタイトルの「ハンガリー社会史」の部分は直訳すれば「ハンガリー国社会史」となる。おそらくは国境内の地理空間全体を対象としているのだろう。だが、地理空間としても19世紀の間にハンガリー国の領域は何度も変化している。しかしながら、実体的な空間以上に重要なのが、概念上の境界だろう。ハンガリー社会に含まれる個人や集団は、論者や時代ごとにどう異なりどう変化したのか。そこで排除されたのは誰か。国勢調査の枠組みとの差異や齟齬は何か。それでも国勢調査が国の地理的境界内部にある者を均一化して示そうとするとは何を意味するのか。これらの問いは、シャシュフィが本書の欠けている点として指摘した、国民国家、政治思想、アイデンティティなどのテーマとつながるだろう。また、本書で取り上げられた統計調査は基本的に1個人を1カテゴリーに属するものとして扱うが、それによって見えなくなるものは何か。つまり、明確な線として引かれてしまう社会内部の境界をどう捉え直すことができるのだろうか。本書ではハンガリー社会を総体として、その分類や分析を中心に論じているため、その社会を生きた人間についてミクロレベルでの動態が見えにくいのも残念である。

訳者あとがきにも記されている通り、本書によって、出版時におけるハンガリー社会史の研究成果を、以上のような問題も含めて、総覧することができる。ただし個々の論点や記述に関して、誰の議論を基にしたものなのか、また、どこまでがケヴェール独自の解釈なのかが不明な箇所も見られる。研究動向を整理する意味でも明記すべきだったろう。テーマによってはケヴェール自身の研究成果が記されている部分もあるのでなおさらである。なお、英語版には脚注が付されている。テーマにより叙述の濃淡があるのは、ケヴェールの問題関心にも左右されるが、

当時の社会史研究の進展状況を反映しているからである。もちろん、現地の研究はその後も急速にそ野を広げた。2013年に発行された『珊瑚』誌の50-52号では、それぞれ、結びつきとネットワーク、音楽、交通の特集が組まれている。これだけでも、本書でほとんど扱われなかったテーマや視角が議論されるようになったことがわかる。

本書の訳文はやや表現が硬くて難解なところもあるが、原著の文章も決して読みやすいものではない。原著と照らし合わせてみると、訳者が原文に忠実かつ精確たろうと努めていることがわかる。原文には小見出しと中見出しがなく、訳者が補ったことは凡例に記されているが、ときに本文とずれた読みを誘導してしまう場所もあるように感じた。だが、原著と比べると格段に読みやすくなっていることは確かである。また、日本語訳では、原著にはない人名・地名索引が付されている。人名索引には短い説明もあり、近代ハンガリー史および近代ハンガリー史研究者の人名事典としても利用できる。事項索引も原著より入念に作られている。なによりも本書を日本語で読める機会を作ってくれた訳者の尽力に敬意を表したい。

## 注

- (1) Gyáni Gábor - Kövér György, *Magyarország társadalomtörténete a reformkortól a második világháborúig*, Osiris Kiadó, Budapest, 1998, 9.
- (2) Sasfi Csaba, Kövér György „Magyarország társadalomtörténete a reformkortól az első világháborúig” c. művéről, *Korall*, 1, 2000, 174-179.
- (3) それまでの記述の例として、社会主義期にハンガリー科学アカデミー歴史額研究所で作成された通史を見てみよう。19世紀は3つの巻に分かれている。1790年から1848年までの巻で「ハンガリー社会」の章は、1. 人口、2. 貴族、3. 農民、4. 市民、5. 知識人の順に記され、集団別に記述される (Vörös Károly, A magyarországi társadalom (1790-1848), *Magyarország története 1790-1848*, Főszerkesztő: Mérei Gyula, Szerkesztő: Vörös Károly, Akadémiai kiadó, Budapest, 1980, 473-599.)。次の巻のうち、1848年から1867年まで

の章「社会的階層再編過程の進展」は、1. 地位を守る大所領持ち大貴族、2. 崩壊しゆく貴族、3. 変容する市民、4. 知識人の職業構造、5. 形成される労働者階級、6. 分化する農民、という順で集団ごとに記されるが、それぞれが何らかの変化を被っている表現が付隨する。1867年から1890年の章「人口と社会構造の変化」は3節に分かれる。1. 人口増加と流動性、2. 居住と社会の構造、3. 住民のエトノスと宗派による区分、である。社会構造については第2節の中で「職業と社会の構造」として職業統計が短く概観されるだけである (Szabad György, A társadalmi átrétegződés folyamatának előrehaladása; Katus László, A népesedés és a társadalmi szerkezet változásai, *Magyarország története 1848-1890*, Főszerkesztő: Kovács Endre, Szerkesztő: Katus László, második, javított kiadás, Akadémiai kiadó, Budapest, 1987, 581-608, 1119-1163.)。1890年から1914年までの巻では「世紀転換期のハンガリー社会」の章が設けられ、1. 市民化と人口の状況、2. 社会構造とに分かれる。後者は「社会的流動性と職業構造の変化」「大地主階級一大貴族」「大都市—金融ブルジョワジー」「中地主階級と中ブルジョワジー」「職員と知識人層」「《ワール的中間階級》」「同化の摩擦」「市民の生活様式」「小市民」「土地所有農民」「農業労働者」「労働者階級」「ハンガリーの社会発展の特殊性」の項目からなる。基本的にはやはり集団ごとに記される (Hanák Péter, *Magyarország társadalma a századforduló idején*, *Magyarország története 1890-1918*, Főszerkesztő: Hanák Péter, Szerkesztő: Mucsi Ferenc, második, javított kiadás, Akadémiai kiadó, Budapest, 1983, 403-515.)。以上からすると19世紀半ばに社会構造が変化し始め、1867年の二重制成立後の時期にハンガリーに特有な形で大きく変化したようだが、ちょうどその時期の記述が欠けていることは興味深い。

- (4) Szalai Júlia, *Újragondolt magyar történelem*, Holmi, 15, 2003/3, 421-430.
- (5) Kővér György, *Volt egyszer egy társadalomtörténet...*, BUKSZ, 2012/3-4, 213-219.
- (6) Tóth Zoltán, *Szekszárd társadalma a századfordulón*, *Történelmi rétegződés és társadalmi átrétegződés a polgári átalakulásban*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1989. 引用部は9頁。